

とうじやしき かまいけ 唐治屋敷と釜池

(緒川新田)

むかし、平安時代・鎌倉時代といわれたころ、
知多半島の中央部を馬の背のように分けて走る
丘陵地帯に、無数の焼物の窯が築かれ、陶器の
生産にたずさわる人たちが、大勢働いていまし
た。

緒川新田の高根山周辺にも、山腹に穴をあけ
て作った数多くの窯跡があり、中から皿や茶碗
やつぼ・瓶などの破片が、たくさん発掘されて
います。



▲ 窯 跡

緒川新田には、北のほうに「唐治屋敷」とい
う字名がありますが、ここは、陶師屋敷と考え
られ、焼物を作る陶師が住んでいたところだ
といわれています。

谷をへだてた南のほうに「釜池」という地名

もあります。が、「釜池」は、もとは、「窯池」で

あったと思われ。山の土に水を加えて皿や

茶碗を作る粘土をこね上げるのに、池のそばは、

便利だったのです。焼物の生地を作り、それを

焼く窯のそばにあった池を「窯池」と呼んでい

たのが、いつの間にか「釜池」と変化して、地

名となって今に残ったものでしょう。

知多半島にたくさんあった山の窯も、室町時

代末には、ほとんど生産をやめ、常滑のように、

燃料を買い入れたり、製品を積み出したりする



のに便利な港のある海岸地帯に移ってしまい、
山地には窯跡と地名だけが残されたのです。

むかし、窯業生産地だった唐治屋敷に、緒川
ようぎようせいさんち どうじやしき おがわ
から人が移り住み、山を切り開いて新田を作り、
ひと うつ す やま き ひら しんでん つく
農耕生活を初めたのは、それより数百年も後の
のうこうせいかつ はじ すうひやくねん あと
江戸時代の中ごろのことでした。
えどじだい なか